

建築と木材の接点

株式会社 ドット・コーポレーション

代表取締役 松木 一 浩

昨年10月28日に林産技術普及協会の主催する表記の講演会が、松木一浩氏を招いて開催されました。木材産業の建築の分野における歴史的な位置付け、そしてあるべき姿など広範な話題を氏の巧みな話術で操り広げられ、林産業に携わる多くの聴衆の心を引き付けました。

その講演の内容を、2,3月号にわたって掲載します(編集委員会)。

講師紹介

昭和40年 東大工学部建築学科卒業
その後、修士・博士課程を修了
修士課程在学中に和光大学芸術学科講師
昭和48年3月 (株)ドット・コーポレーション設立
(建築工法、建築関連商品の開発)
昭和52年 同社代表取締役 現在に至る

公職関係

昭和42年 日本建築センターの量産住宅評定委員
昭和48年 建設省工業化長期構想策定W.G委員
昭和59年 建築学会構法計画小委員会委員

木造建築とのかかわり

ただいま御紹介いただきました松木でございます。私は昭和40年代には皆様のある意味では敵であったプレハブ住宅の指導育成というのにかかわりあっていた人間でございます。そしてオイルショックの後、どちらかという私は木造の住宅を建てる方々の相談にのることが多くなった訳です。東京という市場で木造は建売にはかなり使われていますが、その人たちがある種の危機感を持った。そうした時にオイルショックにもかかわらず、なんとなくうまくやっているプレハブ屋さんたち……その辺の知恵を我々にも教えてくれないかというような形で木造との縁ができたと思っています。基本的に40年代といえますのは、だんだんと材料ベースの工業化が一段落し、そうした物をいかに建築に、あるいは部品に使っていくか、付加価値を高めようという動きが始まったばかりのころでした。そうした意味で、大学を出て本当は大変設計が好きだったんですが、ある先輩に誘われて、『良い部品良い材料が供給されなきゃ建物なんて

ものは良くならないよ』という様な説得をされ、なんとなくそういう方向へ道をとった訳です。

木造建築フォーラムの設立

今、いろいろな角度から木材の復権が叫ばれています。東大名誉教授の内田先生を初め杉山先生とか、材料関係でいうと元の林業試験場の上村先生なんかと一諸に『木造建築研究フォーラム』というものを創る気運ができてきたのも、一つには今までやってきたことの反省というところで、新しい木造あるいは新しい材料というものをもう少し真剣に建築屋が考えるべきだ、そのためには多分ここにいらっしゃる林業関係の人たちとの対話が必要であろうというようなことで建築学会という枠にとらわれず、むしろ林業関係の人たち、実際に現場で工事をやる人たち、あるいは設計をやる人たちと一緒に勉強をしようじゃないかという様な趣旨でフォーラムを創った訳です。

世界の木造圏の中で

東ヨーロッパあるいはソ連圏は、「そんな所にも木造があるのか」と思われる方がいらっしゃる

かもしれませんが、かなり木造の国です。もちろん北欧もそうです。そういった国々へ、新しい木造があるのではないのですが、19世紀ごろの木造をここ5年くらい毎年1回訪ねて、それは研究というほどではなく見学をしてきた訳です。その体験から日本という国で建築と木の接点というようなものを語るとすれば、とにかく19世紀は世界一流の木造建築国であったということが実感として感じられます。例えば日本でいう軸組工法に近いような工法を持っている国もある訳です。黒海沿岸などはやはり同じように高温多湿地域です。したがって、若干高床式の日本の家屋に非常に似た建物があります。そういう所で日本の繊細な木造建築、例えば数寄屋に代表されるような木造建築あるいは農村における民家といったようなレベルと向こうのレベルを比べますと、日本ははるかに進んでいる。それがどうして木造を見直さなきゃいけないような国になってしまったのか。そういうあたりから考えていく必要があると思うんです。

明治以降の建築学

建築学に半分足をつっこみ、実務に半分足をつっこんでいる人間である立場から建築学を若干批判的に見ますと、明治に入って日本が受け入れた建築学というのは西洋の建築学です。それはレンガであったし、あるいはコンクリート、あるいは鉄という産業革命の後に生まれた新しい材料を中心に近代建築といわれる分野をどんどん吸収する努力をした。その時に建築学会というのは、非常にマクロに見ますと、『木との接点を断っている』というのが一つの反省なんです。木造建築研究フォーラムの中に建築の歴史をおやりになっている稲垣先生がいらっしゃいますが、その方がフォーラムの設立の時に『100年ぶりの出来事だ』とおっしゃったんです。要するに建築学というのは、ある意味では木との縁を過去100年間断ってきているというのが実情でございます。それにもかかわらず多分皆様方過去100年間さほど心配もせずにこられた。どうしてかといいますと、学問と縁は切っても実際の仕事は大工さんという大変な組織があったため、お互いに食べてこられたというようなこ

とがいえると思うんです。

木を扱う職人の減少

建築家側から見ますと、木は沢山ありますよという話が持ち上がってきたと同時に、木を扱う職人が減ってきたという事実が問題になってきています。これは今まで、特にオイルショックのころまでは多分皆さん何の不安もなく木を供給していれば良かった。それはなぜかというと、学校の先生方あるいは一流の設計者は余り顧みてくれなくても、巨大な大工さんの組織、事業所統計で50万軒という工務店、そういう組織に支えられていたからです。そういう人たちがものすごい勢いで没落していつているのをどう考えどう受けとめるか。これから木と建築の接点を皆様の側から求めようとされるなら、そこまで考えを及ぼしていただくことが多分必要になってくるだろうと思います。

木造国との幻想

確かに建築学というのは、明治以来本当に木のことを勉強する機会を失ってきました。建築の歴史の評価でいっても数寄屋造りといえますか、今の木造工法がある意味で一つの完成を見せるのは明治あるいは大正という時点だといわれている訳です。この中には多分戦前を過ぎてきた方もいらっしゃると思いますが、そういう人たちにとってみれば日本の木造技術というものは昔々と続いていたように映るかもしれないんです。現に大正年間に建てられた建物の中で大変優れた和風の木造住宅というのは現存しています。ですけれども、それは一部のお金持ちによってのみ支えられていたというのが実情だろうと思います。例えば北海道で有名なにしん御殿というようなもの、あれにしても本当に一部のお金持ちによって木造技術の優れた部分が支えられてきた。一般庶民はどうかといいますと、そういうものとは全く無縁の所でプレハブあるいは建売という世界で、とんでもないものを木造だと信じて、木造には違いないんですが、昔から伝統的に造られている日本の優れた木造だと信じて疑わずに買ってきている。実際に建売に住んでみると、10年もすると戸が開かなくなる、床が落ちるといったような事故がしょっちゅう

発生している訳です。そういうふうに皆なんとなく幻想によって過去日本は木造の国であると思っていた訳ですけども、実はここ何十年かはそうじゃなかったというのが今現在認識しなきゃいけない事だろうと思います。

戦後の住宅政策

戦後一番最初に建設省が進めた政策というのは何かというと不燃化なんです。その時にかなり木は除外される運命にあった。特に都市における不燃化、これは戦争であれだけ焼け野が原になれば当然思い付かざる得ない結論な訳で、不燃化政策というのが徹底的に進められました。それからもう一つは関東大震災の後、日本にはなかった布基礎というような西洋的な発想の工法を受け入れると同時に、筋違を受け入れます。それが本当の意味で法制化されたのが、昭和25年の建築基準法です。そこに生まれた木造というのは昔から大工さんたちが営々とノウハウとして伝えてきた木造とは全く違うものです。それにもかかわらず木で造られているというだけのことで木造というふうには皆は思い込んできている訳です。

戦後焼け野が原といえども実際に戦後すぐに不足していた住宅というのは420万戸です。所帯数は今ほど多くはありませんから、かなりな数であることには間違いありませんが、今現在例えば昨年の住宅の生産量というのは120万ですから、4年分にも満たないくらいの量が足りなくて大騒ぎをしていた時期があった訳です。そこで建設省が何をやったかといいますと、工業化という政策の促進です。この工業化というのがプレハブあるいは新建材を生み出し、そして鉄、コンクリート、アルミ、あるいはプラスチックといったような工業材料がどんどん現在の建築に使われるようになった。それが最も強く出たのが昭和40年代だろうと思います。40年代は、工業化のある意味では全盛期です。

日本の住文化

50年代に入ってそうやってできた建物をじっくり眺めて見ると、これはやっぱりストックに値しないなあという感覚がなんとなく出てきた。その

ころ例のECの報告書の中に『うさぎ小屋』という言葉が現れるに及んでついに「日本には住文化がなかった」と...、なかったわけじゃないんです。戦後必死に生きてきた、その中で日本は日本なりに新しい住宅像を求めてきています。当然昔のような生活様式とは違ったものに対応できる住宅のプランを作ってきた訳です。それが大体52～3年ころです。

日本の森林資源

それからややしばらくしてよく考えてみると日本の森が、植林がどんどん育ってきた。昔は間伐材を丸太に使えたのが使えないとか、その辺の事情は皆さんの方がお詳しいと思います。そうやって育ってきてよく統計を見てみると日本は世界一の森林国に近づいているというような話が皆の耳に伝わるようになってきた。で、木をなんとか使わなくては行けないというのが、一つの表れとなって出てきた訳です。もちろんそれにはアメリカからの外圧もあります。そのようなことの中で木が見直されようということになってきているんですけども、その間に先ほど言った木造の伝統的な生産体制というものが大変疲弊をしていた訳です。疲弊をしていると同時に、もちろん姿を変えているというのが正しいと思います。

住宅産業の変化

戦後一番大きな社会変動というのは、一つは人口の都市集中です。もう一つは核家族化です。都市集中がどういう現象をもたらしたかという、家を造るべき市場が都市近郊に集中したということです。それから核家族化という形の中で家が数多く求められるということがあります。この二つがかなり都市部に集中しました。ところが実際戦前を支えていた大工さんの組織というのは地場産業として成立していた訳です。それがあつ時東京に需要があるからといって急に東京へ出ていく訳にはいかんです。経営的な素質といいますが、棟梁（ひょう）的な素質と言った方が技術的かもしれませんが、そういう人たちは出てこなくて職人に成れるか成れないかのスレスレの人たちが一旗揚げしようというような形で東京へ集まってきた訳です。で

すから東京で今沢山の工務店がありますが、そのほとんどが戦後にできた工務店です。ですからいわゆる古くからの地場産業というノウハウを受け継ぐような形で一つの工法を守ってきた19世紀あるいは20世紀初頭にかけての日本の木造技術とその生産供給体制というものはメタメタにちよん切れている訳です。

建築と木材との間のリハビリ

そういう意味で建築というものと木の接点というのは、いろんな所でブツ切れになっていたのをこれからどうやってつなぎ直していくか。ここにいらっしゃる方は皆さん元気な方ばかりですから脳卒中になった人はいないと思いますが、脳卒中になると人間の脳の中の一部が破壊されます。それと同時に神経といいますか、情報伝達線みたいなものが破壊されショートしてしまいます。そういうことによって人間の機能は、手が動かなくなったり口がきけなくなったりいろいろする訳です。ですけれど人間というのは大変な回復力を持っていて、それを除々に徐々にですがつないでいく、あるいはショートしたものを被覆しなおしていくというような形で人間のリハビリテーションは可能になっている訳です。今木材そして建築との間でズタズタになっている神経あるいは欠落している脳細胞をどうやって修復していくか。これには相当期間のリハビリがいるというのが私の実感です。人間のリハビリにはいろんな機械が使用される、そしてトレーニングマニュアルがあります。そういうものなしにやみくもに素人療法をやってもなかなかスムーズには人間もう一度手の機能あるいは言葉の機能を回復することはできないんです。それと同時に本人の努力が大変必要なんです。要するにズタズタになったものをつなぐ期間がこれから始まったという時にどういったリハビリのマニュアルがあるか、私が今日招かれた理由の一つは多分40年代に私が勉強した工業化あるいはシステム化という所に、このリハビリに対するトレーニングマニュアルなり医療機器の類というものがないだろうか、あったら教えてくれというのがその趣旨だったんだろうと思います。

戦後40年たった今、木材業界もそうだし建設、特に中小の工務店もそうなんですが、切れっぱなしになるのをほったらかしていた。それをある意味でうまくつないで企業化したのがプレハブ屋さんなんです。あるいは木造系の住宅産業屋さんだと思います。ああいう形で日本の中に一つの住宅の生産システムを従来とはまるで違いますが作り出した。そう考えますと、彼らが歩んできた道の中でほったらかしにしていた所と大きく違うのは何だ。私は一番違うのは『品質保証』という問題だろうと思います。それからもう一つ『ユーザーは何を考えているんだ』と考える気持ちだと思います。

品質保証の問題

木材にはJASという農林規格がありますが、それだけでは非常に頼りなくて建築屋はそれを信じていいのかどうか分からないでいます。例えば古い茶室で小径木が使われているとすると、それをまねて今のほぼ同じ大きさに育った間伐材を使ったら、多分軒は垂れてくると思います。なぜかという茶室に使われている小径木化粧垂木は50年の歳月を経てあれだけにしか育たなかった木が使われている。同じ太さを持っているからといって10年であるいは5~6年でその太さになったものと50年かかったものとは、まるで強度が違います。そういうあたりが果たしてJASの規格にあるか...、ないですね。また設計者はそれをちゃんと理解しているかということ、そうじゃないです。見せ掛けで使っている。昔は大工さんが「こんなもん使ったらだめだよ、使ったら1年もしないうちに軒が垂れてくるよ」と教えてくれた。そういう大工さんはだれも育てていない訳で、今大工さんに相談したって「まあこんなもんで良いんじゃないですか」と分からないままにそれが通ってしまうという事が多分起きると思うんです。それでは本当の建築にならない訳です。そういう事があちこちで起きている。実際建築で最終的に品質というものを保証するときに、建築に使われた状態でその品質を考えるという事が大事なんです、なかなかそこまでやらなくとも、皆さん多分今まで売

れてきただろうし、いい加減な大工も買っていただろうし、いい加減な設計者も使っていただろうと思います。

コミュニケーションの必要性

そういう意味で木と建築の接点というものをもう一度考え直さなきゃいけない人間というのは沢山いるんです。ですけれど、皆それがどこへ行けば教われるか分からないでいます。多分皆さんは木の性質については相当詳しく研究もされ、ノウハウもためていらっしゃると思います。しかし建築屋と真剣にそういう対話があったかという、多分なかったらと思うんです。木材業界に限らず建築材料の業界というものにとって、建築設計者というのは第一次のユーザーです。もうちょっと身近に考えると工務店かもしれませんが、その人たちが余り木のことを知らずに木を使っています。そうした時に皆さんの知っていらっしゃる木のことをそういう人たちに教えてあげてほしいというのが、まず第一にあります。今から勉強したって、これがトドマツなのかエゾマツなのかなかなか区別が付かない。そうしたらどうするかといったら、これはトドマツですよ、エゾマツですよという表示をちゃんとどっかに書いていただくという事が必要だろうと思うんです。もちろん世の中いるんな人がいますから当然木の見分けのできる人もいますし、ディテールをちゃんと書ける人もいますが、日本全体で考えた時に、そういう特殊な人たちだけで建築ができるかという決まてできないんだということなんです。毎年2万人くらい卒業していく建築学科の生徒たち、あるいは大工の技能を修練して覚えていく職業訓練学校の人たち、こういう人たちによって日本の木造住宅は今後も支えられていく訳です。そういう人たちにそこまで細かく教えていたら修業年限が幾らあっても足りません。ですから当然ちょっといい加減なところで卒業して現場で経験を積んでいくという事をやらざるを得ません。そうした時にお互いに間違いを起こさないようにするための第一歩は、

どういうコミュニケーションの手段を持つか、どういう通信網を持つかということだと思っんです。それが皆さんの都合のいい通信網だけではなく、建築家側にとっても都合のいいように通信網を張り巡らしてくださる努力が必要になってくる訳です。

木材業界の課題

昭和40年代には大きなメーカーが建材に使えるかなあというような材料を次々と開発しました。プラスチックあるいは窯業系のボード類、そういったものを次々と実験室で生み出した訳です。それが実際の建築に使えるかどうか、彼らはいったんむしろ旗が立ったら大変なことになるんで非常に神経質になって、それが建築に使って問題がないかどうかということを一生涯懸命実験してから世の中に出す努力をしました。もちろんうまくいかなかった例もありますが、少なくとも努力はしました。そういう努力をする時に建築側の人間がいた方が彼らにとっては都合がいい訳です。その建築家側の人間として私は雇われて「建築で物を使う時にはこうでなきゃ困るよ」、「大工さんが使うためにはこうでなきゃ困るよ」というような話を一つ一つぶし商品にして出していく。そういう努力を彼らはやったんです。木材業界は、ほとんどそういうことをおやりにならなかった業界の内の一つだと思います。これは建築側も悪かったし、大工さんも悪かったと思います。どうしてかというと、大抵の建築家というのは「木は良いですよ」と何が良いのかは説明せずに「日本人にとって木は」というふうに非常に次元を超えた高いレベルで評価する訳です。ですけれど実際に使われている木というのは次元をはるかに下回ったものが使われている。このギャップは大きいんです。知らないんです相手は、知らないんですから分かるようにして下さいというのがまず第一点です。

以下1987年 3月号に続く

(文責 前田典昭)